

私の歩みと経済学

私は愛媛県で生まれ、小中高校を香川県で過ごしました。小学高学年からずっと社会科が大好きで、親戚の高校地図帳を頼んで送って貰ったほか、新聞、統計集や歴史物なども愛読していました。

(ニクソン・ショックの衝撃)

小学生の頃、日本経済は高度成長期のまっただ中で、年率約 10% の高い経済成長を続けていました。この日本経済の快進撃に冷水を浴びせたのが 1971 年 8 月のニクソン・ショックです。当時のニクソン米大統領の政策変更に伴い“ 1 ドル = 360 円 ” の固定為替相場が維持できなくなりました。その頃私は“ 円の角度 360 度と同様 1 ドルは 360 円だ ” と思っていましたので、円高になって驚きました。当時は“ 円高で輸出企業が大打撃を受け、日本経済が立ち行かなくなる ” との悲観的な論調が一般的だったこともあり、子供心に不安を覚えました。

その後、為替相場は一時 1 ドル = 308 円で固定されました (スミソニアン協定) が永続せず、1973 年 2 月に変動相場制度となって今日に至っています。為替相場は 1995 年に一時 79 円台を記録するなど大幅に変動しており、相場変動の要因につき常に関心を持ってきました。

なお、上記の新聞・テレビの論調とは裏腹に、日本経済はバブル経済期 (1986 ~ 90 年頃) まで中成長を続けました。マスコミの論調を鵜呑みにしてはいけませんよ。

(経済学との出会い)

大学受験の時には、文学部で歴史を学ぶか経済学部を受けるか迷いました。高校の数学も面白くて理科系にいましたが、担任の井上先生 (ご専門は日本史) から、「プロの歴史家になるには卒業後も長くかかるが、経済学だと数学も歴史も学べ、職業選択の幅も広い」と助言して頂きました。人間の営みを学ぶ点では同じだと思い、経済学部を選びました。

大学では、ニクソン・ショックの記憶などから金融論や国際金融論に興味を持ち、大学 3 ~ 4 年では濱田宏一先生のゼミに属しました。ゼミでは金融論のほか、当時最先端の「開放マクロ経済学」の手ほどきも受けました。経済学は経済現象への多くの疑問に答えてくれましたので、一生の仕事にしたいと思いました。

大学卒業前には、運良く内定をくれた日本銀行に入るか、大学院に進学するか迷いました。退職の近い父に経済的負担をかけまいと、日本銀行で勉強することにしました。

(職場での経済学)

日本銀行では、まず外国局や金融研究所などで活きた経済を学びました。その後、濱田先生が米国イエール大学に移籍されたのを追う形で、1986～88年にイエールに派遣されました。米国での大学院生活では、膨大な宿題や文献リストに追われましたが、**万国共通の数式**に随分助けられました。米国留学の2年間、**濱田先生に再び大変お世話になった**ほか、同じクラスの**福田慎一氏**(濱田ゼミの後輩、今は東京大学教授)などと日本経済等につき大いに議論したことも良い思い出です。

帰国直後には日本銀行大阪支店の勤務となり、**バブル経済真っ最中の大阪を目撃しました**。経済学は早くから「合理的バブル」の理論的可能性を指摘しており、その心得のある人は(私も含め)日本経済のバブル化とその崩壊を警告しました。しかし、殆どの方は無視して「大阪でも漸く地価が上がってよかった」と無邪気に喜ぶ有様で、もどかしく感じました。案の定、**バブルの崩壊は大きな傷跡を残しました**。**経済学の知恵も人々に理解・支持されなければ役に立たない**のです。

その後も、日本銀行の国際局や情報サービス局、出向先の郵政研究所などで**経済学に助けられました**。また、日本銀行考査局に勤務した時には、金融機関の人達と接してリスク管理の重要性を学びましたが、**金融実務面でも経済学の知識が役立つ**ことを知りました。**日本銀行での経験を活かし、金融実務家と経済学者の架け橋**となろうと思いを立ちました。

本学に移る前の2年間は大阪大学に出向し、経済学部で「現代日本経済」や「金融機関のリスク管理」を教えました。一生懸命説明したところ、**多くの学生諸君が興味を持ち、質問してくれました**。**若い人達の意欲に感心しました**。

本学でも、経済学を学んだときの**初心を忘れず、その有用性やバブル崩壊の多くの教訓を**、できるだけ多くの若い人々に知ってもらいたいと念願しています。

安孫子勇一(経済学部 経済学科 教授)